

月8日に生まれていることがあ
 る。4月8日はお釈迦様の誕生
 日である。祖母は私とお釈迦様
 とを因縁つけた。「唯我独尊」
 だけなら釈迦と似ていないこと
 もない。人は、だれかに褒めら
 れたくて生きている。

福の黄色いハンカチ』の夕張炭
 鉱、雪の『八甲田山』。北極、
 南極、アラスカ、アフリカまで、
 三十数年駆けつけてこられまし
 た」と書いている。結びは「あ
 なたに代わって、褒めてくれる
 いいタイプがある。名づけての監

の女の先生が私の絵を褒めてく
 れた。「上手かねえ。まっと丁
 寧に描けばまっと上手になると
 やなかと」。その日から、私は
 絵は丁寧に描くことにしてい
 る。

褒められて生きる

高倉健さんのエッセー集「あ
 なたに褒められたくて」では「お
 母さん。僕はあなたに褒められ
 たくて、ただ、それだけで、あ
 なたがいやがっていた背中に刺
 青を挿れて、返り血浴びて、さ
 いはての『網走番外地』、『幸

人を誰か見つけなきゃあね」で
 督はこれを上手く使い分ける。

ある。

私は褒められると有頂天にな
 るタイプである。星鹿の幼稚園

星鹿小学校時代の女の教師は
 よく私を殴った。それも拳骨で
 頭を殴るのである。感情的な殴
 りであった。愛に鞭はいらない。
 女の平手打ちならうれしかった
 りもするが、拳骨はいけない。
 よっぽど私との相性が悪かった
 のだろう。親と子、上司と部下、
 男と女、同級生。相性の悪さは
 犯罪すら生む。国と国なら戦争
 である。

（松浦市出身）

振り返った松浦には、海があ
 り炭鉱があった。そして、私を
 溺愛してくれた星鹿の祖母がほ
 ほ笑んでいた。勝山キヨといっ
 た。早くに連れ合いを亡くした
 祖母は旅籠を営んでいた。「亀
 の甲より年の功」が口癖であっ
 た。

なぜ祖母は私を溺愛したの
 か。孫で男は私だけだったとい
 うこともあるが、やはり私が4



おかべ けんたうだい 1979年に
 「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、
 89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個
 人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。
 松浦市で毎年、子供たちにミュージカ
 ルを指導している。川崎市在住。70歳。